

# 縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一試論

高 山 純

## 1. 緒 言

縄文時代に耳朵の穿孔部に栓状の耳飾、即ち耳栓を挿入着装する風習の流行したことは、周知の如くである。この耳栓の起源に関して古く鳥居竜蔵博士<sup>1)</sup> (1924) は琉球荻堂発見のサメ類の脊椎骨にヒントを得、更に三河伊川津に於ける人骨に附随した一對の類品を例証として、祖型を魚類の脊椎骨に求められた。

然るにその後、樋口清之博士<sup>2)</sup> (1941) は尨大な資料の聚成とその綿密な比較分析によつて、この説を更に強唱され、しかもその出現の時期を当時漸く発達してきた編年の研究によつて中期中頃の勝坂式に遡ると考えられた。尤も現在では最古の耳栓は中期初頭の五領ケ台式まで遡及されそうなので、その差は僅か一型式に過ぎず、この点は高く評価されてしかるべきものである。この論文は非常に優れたもので、今日と雖もこの種の研究としては唯一の文献でさえある。従つて現在学界で容認されている椎骨起源説は全くこの研究に負うものであるといえるのであるが<sup>3)</sup>、唯、その結論が専ら型式学的研究法に基づいて得られたものであつた結果、その後長足の進歩を遂げた編年の研究の成果とは次の肝心な点で大きな矛盾を引起したのである。即ち、魚類等の脊椎骨を利用してつくつた耳栓は、後・晩期にのみ限つて見出されるもので、確実に中期に比定される例は皆無である。尤も中期に於ける椎骨製品は2例<sup>4)5)</sup> 報告されているが、実見した所では共に耳栓とは見做し難いものであつた。また椎骨製耳栓と同様に基礎的形態とされている同形状の土製耳栓も関東に於ては、後期加曾利B式<sup>6)</sup>、東北に於ては同じく大湯式<sup>7)</sup> に伴出する典型的なものであつて後述の如く中期には、例外的に存在するに過ぎないとさえいえる程稀少である。

要するに現在、縄文時代の耳栓を詳細に調べてみると、椎骨起源説には無理があり首肯し難いということになる。

それでは耳栓の起源は、一体何に求められるのであろうか。そのためには、先ず最古の耳栓、換言すれば中期の耳栓に就いて充分に知らねばならない。そこで次に中期の耳栓に就いて述べてみよう。

## 2. 中 期 の 耳 栓

今日、縄文時代の耳栓は、その発現を確実に中期にまで遡及し得る。それは、この時期の人骨耳部附近に於ける該種遺物の

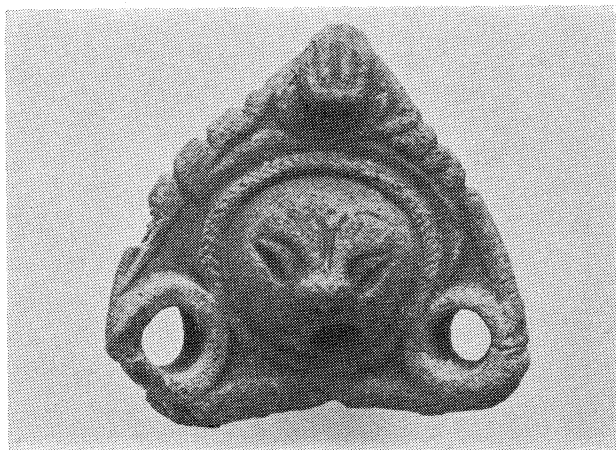


Fig. 1 I A 型耳栓を着装した顔面把手，東京都草花出土（塩野半十郎氏蔵）

発見<sup>8)9)</sup>, また屢々勝坂式土器につけられている, 所謂顔面把手の耳部に表現されている同形状のもの, 殊にこれは Fig. 1 に見られる如く中期耳栓の特徴を極めて正確に示している。更に耳栓自体の中期の遺跡からの出土により容易に首肯される。

縄文時代の後・晩期に流行した耳栓は, 東日本に濃厚に分布したが, 中期に於ても略軌を一にし殆んど中部・関東に偏している。これは顔面把手の分布範囲<sup>10)</sup>と大略一致し興味深い。

また後期以降にあつては, 1 遺跡から 50 個以上の耳栓の出土も稀ではないが, 中期に於ては若干の例外を除き, 1 遺跡 1~2 個が一般的傾向である。この事実は, 耳栓の未だあまり普及していないことを示唆しているものと解せられるであろう。

中期の耳栓は, 他の時期のそれに比して形態・文様・色調・焼成・土質等の点に於て特異であつて, 容易に他の時期のものと識別可能であり, 就中, それはその形態及び文様に於て著しいため, 後述の如くこの点に基づいて中期の耳栓を分類した次第である。色調は灰色乃至赤褐色が一般的であり, 焼成はあまり良好ではなく, また土質は稍粗い。

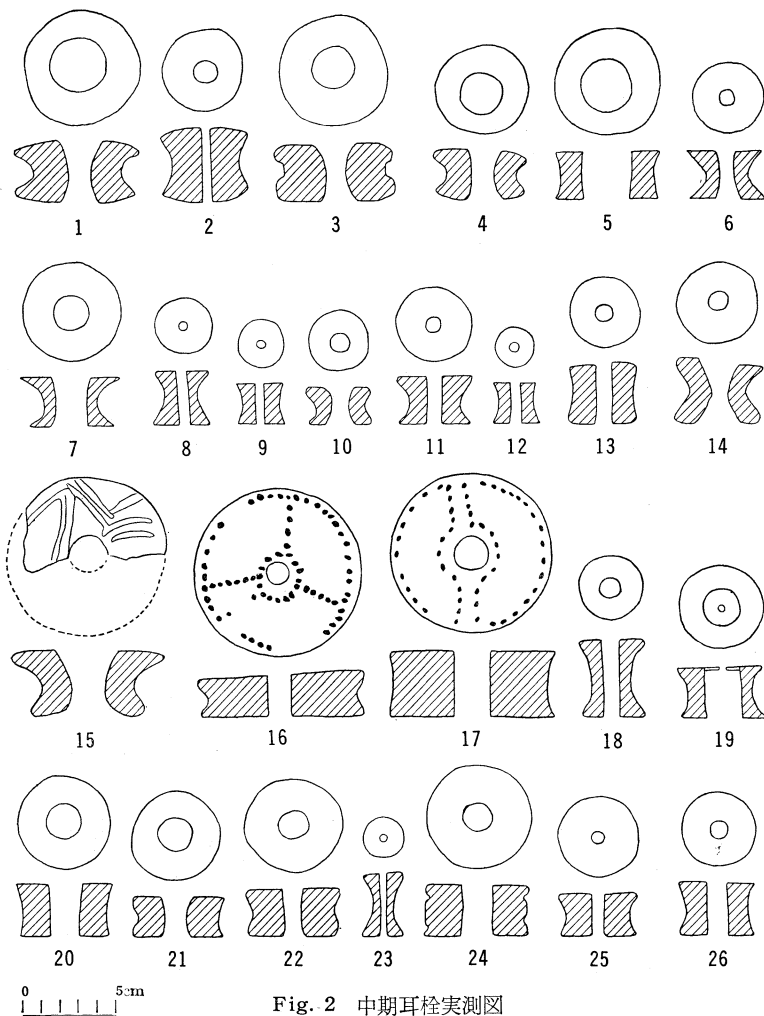


Fig. 2 中期耳栓実測図

従つて、古くから所属時期の不詳であつた耳栓の中でも確実に中期に比定され、十分に資料として利用できるものもあり、Table 1の中にはこの種の耳栓も含まれている。

さて、現在までに中期の耳栓を出土した遺跡は 36 箇所、合計 76 個の耳栓が発見されている。勿論、これ以外にも若干の資料があるが、未発表のため差控えたことを付記しておく。

ところでこれらの耳栓を理解し易くするため便宜上中心孔の有無により 2 型式に大別し、更にそれを両面にみられる差異から 5 乃至 4 種に細分することにする。

A 種（両面が平滑、屢赤色顔料塗布及び文様施文）

B 種（片面が弯曲、屢赤色顔料塗布）

I 型（中心孔有り） C 種（両面が弯曲）

D 種（中心孔大きく筒形、屢赤色顔料塗布）

E 種（弯曲した片面が喇叭形、屢赤色顔料塗布）

A 種（I E 型の中心孔無し）

B 種（I B 型の中心孔無し、屢文様施文）

II 型（中心孔無し）

C 種（I A 型の中心孔無し、必ず刺突文有り）

D 種（I A 型の中心孔無し、必ず隆線文有り）

即ち、IA 型は必ず中心孔を有し、上下両面が恰も鋭利な刃物で輪切りにされたかの如く極めて平滑になつており、また一般的に扁平を呈すもので、古く報告された新潟県馬高<sup>1)</sup>の耳栓を以て代表される（Fig. 2: 1~4, Pl. II: 5~6）。但し同報告書中 6 として示されている耳栓は除く、これは後述の IC 型に入れられるものである。従つて馬高に於ては合計 9 個の IA 型耳栓があげられている。しかしこれらの耳栓は総てが全く均一の形態を呈しているわけではなく、細部に於ては若干の差異が認められる。

例えば、上下両面が完全に平らなものばかりではなく、中には両端に向つて僅かに傾斜し、丁度凸レンズ状を呈すものや、一端に向つて傾斜しているものなどがある。その他上下両面の径が等しくないもの、尤もこの種の耳栓は側面が著しく括れる傾向があるが、また比較的縦長のもの、中心孔が極めて細いもの等種々の差異が認められる。しかし上下両面が一様に平滑である点に於ては変りはない。尚、これら種々の差異は馬高以外の IA 型耳栓にも屢認められる特徴である。

要するに上下両面の平滑という特異な特徴は、不確実な数例を除けば、全く中期に限つてのみ見出され典型的な手法であつて、あれ程流行した後・晩期の耳栓には全く認められないものである。殊に中期という枠の中で時間を無視し、空間的に通観してみるならば、宮城・福島・茨城・千葉・東京・山梨・埼玉・長野・山形・新潟・富山・岐阜と 12 県に亘つて分布し、しかも中期の耳栓の 55% を占めているという事実は、この特徴の決して偶然に生じたものでないことを示唆している。そしてもしこれが製作技術の巧拙に関係なく生じたものであるならば、そこには明らかにこうしなければならないという何等かの原因が伏在していることになり、換言すれば、それは祖型が本来有していた形態と密接な関係があると考えられるのである。即ち、この特徴は祖型を究明する上に重要な鍵となり得るらしいことが判る。

では次にこの種の耳栓を時間的に考察していこう。実は IA 型で最も注目すべきことは、福島県音坊出土の最古の耳栓が含まれていることである。これは大木 7 a 式に伴い中期初頭の資料としては唯一の貴重なものである。形態は Fig. 2: 5 にみられる如く扁平で、IA 型の

典型的なものである。

しかし中期も中頃の勝坂式の時期になると漸く資料も増加してくる。典型的な勝坂式土器の出土で著名な都下多喜窪<sup>12)</sup>に於ける第1号堅穴より Fig. 2: 6 にみられるような側面が著しく括れ、全面に丹の塗布された痕迹のある IA 型耳栓が1個出土した。ところでこれと殆んど同じものが長野県大深山<sup>13)</sup>に於ける勝坂式に属す第6号堅穴より出土している。唯、この耳栓は片面が稍弯曲しているため一応 IB 型に入れたのであるが、実際には IA 型と見做しても差支えないものである (Fig. 3: 28, Pl. I: 4)。更に類例が山梨県坂井<sup>14)</sup>からも発見されている (Fig. 2: 7, Pl. I, 6)。尤もこれには赤色顔料の塗布は認められず、しかも時期に就いては勝坂式から加曽利 E 式に亘る混合遺跡のため、どちらに属すかは明らかでない。また古く鳥居博士の報告された長野県北山浦地方<sup>15)</sup>出土の耳栓も明らかに同じものである。

その他この時期の確実な例としては、埼玉県高麗台 (Fig. 2: 8 Pl. II: 3)、都下中原<sup>16)</sup> (Fig. 2: 9, Pl. I: 2)、長野県藤内<sup>17)</sup> (Fig. 2: 10, Pl. I: 3) などがあり、また時期不詳ではあるが、この時期の所産と見做して略大過ないものとして茨城県磯部<sup>18)</sup> (Fig. 2: 11-12, Pl. II: 4)、富山県北代 (Fig. 2: 26, Pl. II: 1)、東京都千鳥町発見<sup>19)</sup>の耳栓がある。

尚、ここで問題になるのは千葉県布瀬<sup>20)</sup>出土の耳栓である。これは阿玉台式に伴出したものであるが、実は両面が Fig. 2: 13, Pl. II: 2 をみれば判るように、あまり平滑ではなく多少不規則であり、厳密に言えばこの型式の条件にあてはまらないものである。しかし中心孔周辺の隆起は馬高の IA 型の中にも屢認められるもので、これは中心孔を穿つ過程で中に挿入された棒が、中の粘土を押出した結果生じたものであろうから、本来ならこの後、これは平滑に整形され IA 型となつたのであろう。従つてこれは、謂わば IA 型の未完成品であろうという理由から IA 型に入れた次第である。実はこれと同じ現象を示した耳栓が、かつて山内清男博士の発掘調査された有名な宮城県大木圀貝塚<sup>21)</sup>からも出土している (Fig. 2: 23)。

唯、博士からこれは大木 5 乃至 6 式に伴出したようであるとの御教示を頂いたのであるが、他にこれと同時期と見做し得る類例の皆無であること、また土質、焼成、形態等の点から検するも全くといつてよい程勝坂式の耳栓に類似しているため、一応大木 7b 式あたりの所産と見做した次第である。識者の御批判を迎えたい。その他都下貫井<sup>22)</sup>出土の耳栓らしき遺物にも同じ現象の認められることを付記しておく。

さて中期も後半の加曽利 E 式の時期になると更に各地に波及し、西は飛驒の水口<sup>23)</sup>まで確実に見出される。ところでここで問題になるのは鹿児島県下に於ける前期末の塞の神式に併行する石坂上<sup>24)</sup>から発見された2個の耳栓である。調査者河口貞徳氏の御教示によれば、1個は紛失したが、別の1個は上面の径が下面より稍大きく略平滑で隆起文の文様が描出され、しかもその上に赤色顔料の塗布された大型品である (Fig. 8: 15)。丁度 IA 型と後述の IID 型が重複した謂わば混合型式とでもよべるものであり、文様を除外すれば明らかに IA 型のカテゴリーに入れることのできるものである。もしこの耳栓が東日本のそれが波及した結果生じたものであるということが確実になれば、所謂塞の神式の絶対年代は東日本の中期より遡り得ないことになるわけで、将来資料の増加を俟つて再考したい。

一方東は宮城県日向<sup>25)</sup>まで確実に認められる。Fig. 2: 16, Pl. I: 14 は興野義一氏の御好意により教示されたもので、大木 9 乃至 10 式に伴出し、両面には小異の左右対称の刺突文が施文された特異なものである。この種耳栓は大木式文化の終末期に伴うもののようで、最近

では同県幡谷<sup>26)</sup> (Fig. 2: 17, Pl. I: 13) 及び南境<sup>27)</sup> (Pl. I: 15) から出土している。一般に IA 型耳栓は赤色顔料の塗布を除けば文様の無いのが原則であるが、これらは一様に上下両面に小異の左右対称の刺突文が施文されている。唯、この種文様が関東地方の勝坂式乃至加曽利 E 式に伴う IIC 型の伝統の影響した結果発生したものであると推断するには、蓋然性は充分にあるが資料不足であるといえる。

尚、これらの耳栓は形態に於ては特異な特徴を呈しており、一様に 5 cm 以上の大型品で扁平、しかも中心孔が甚だ小さく恰も紡錘車状を呈す点で全く定型化しているといえる<sup>28)</sup>。

ところで千葉県下に於ける武田宗久氏の発掘も特記すべきものである。

蔵立<sup>29)</sup> の第 1 号堅穴住居址の第 2 号人骨耳辺に於ける IA 型耳栓の発見は、中期に於けるこの種遺物の耳飾であることを証明した点で貴重である (Fig. 2: 18, Pl. I: 1)。また月之本<sup>30)</sup> に於ける中心孔にアワビの嵌入された耳栓の出土も興味深い (Fig. 2: 19, Pl. I: 5)。アワビの周縁にピッチの痕跡が認められることより推して、ピッチで固定したものであろう。

最後に中期の比較的後半に於ける IA 型耳栓の普及率の高さに注目したい。勝坂式の新しい時期に比定された馬高<sup>31)</sup> に於ける 10 個、加曽利 E 式併行の枌倉<sup>32)</sup> に於ける 16 個という数字は、それまでの 1 遺跡 1 乃至 2 個とは著しい相違である。尤もこれらの中には他の型式の耳栓も含まれており、前者にあつては 1 個が IC 型であつたし、また後者に於ては IA 型は 3 個で (Fig. 2: 21-22, Pl. I: 7, 9-10)、他は IB 型 1 個、IC 型 1 個、ID 型 2 個、IIA 型 8 個、IIB 型 1 個という割合であつた。

尚、ここで留意したいことは、枌倉の遺物が 2 型式に細分されることである。即ち、枌倉 1 式といわれるものは馬高式の時期に併行するらしいことである。従つて枌倉の IA 型は馬高と殆んど同時期に使用されたものであり、他の型式はこの型式から派生した時間的に後出のものであると考えられるのである。例えば、馬高に於ては皆無で、枌倉にのみ見出される IIA 型は、かつて安岡路洋氏によつて埼玉県大宮文化会館敷地に於て、加曽利 E 式乃至後期称名寺式に伴出したものとして御教示を得た耳栓と全く類似していることもこの推論の傍証となり得よう。

IB 型は必ず中心孔を有し、IA 型の片面が彎曲したものである。前記大深山の耳栓は径の稍大きな面が彎曲していたが、枌倉 (Fig. 3: 9, Pl. I: 8) 及び富山県桜峠<sup>33)</sup> の耳栓も略同じである。しかし坂井<sup>34)</sup> の例のみは両面の径が等しい大型品である (Fig. 3: 27, Pl. I: 16)。

この型式の耳栓は以上の 4 例に過ぎないため確定的なことはいえないが、相互に於ける親縁関係の存在を想定することは、殆んど不可能であると思われる程たがいに共通性は認め難い。多分、各地に於て別々に生じた形態に過ぎず、枌倉に於ける 16 個中 1 個という事実は、この推論の裏付けとならう。寧ろこの型式は片面が平滑であるという点の方を重視すべきである。恐らくこれは未だ IA 型の両面の平滑という伝統から完全に抜出せない時期の所産であることを如実に物語っているのであろう。

IC 型は必ず中心孔を有し、上下両面が彎曲し、丁度凹レンズ状を呈すものである。

従つてこの型式は椎骨起源説を立証する上に極めて重要なものであるが、しかし遺憾ながら今日までのところ、その資料は僅かに 3 遺跡 3 個という全く貧弱なものである。即ち、日本海岸側の馬高 (Fig. 3: 30)、枌倉 (Fig. 3: 31, Pl. II: 8)、それに富山県天神山<sup>35)</sup> に於ける各 1 個づつという現状である。殊に馬高及び天神山の例は、彎曲の程度が極く僅かで椎骨製

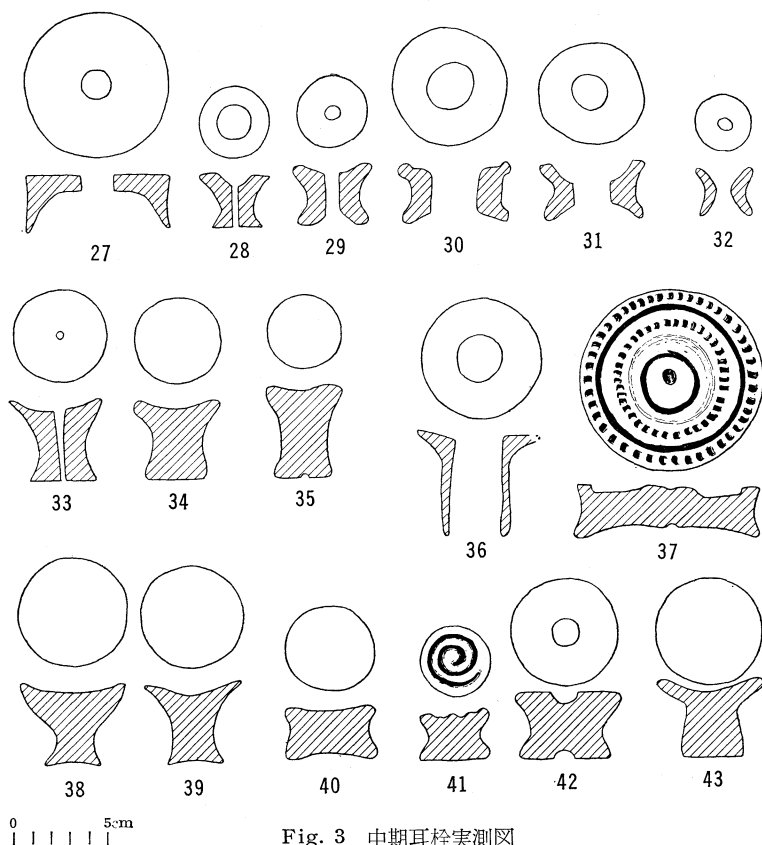


Fig. 3 中期耳栓実測図

耳栓の形態とは殆んど似ておらず、寧ろⅠA型に近似しているといつても差支えないくらいである。この差異が製作技術の拙劣に起因しないことは、これより古い前期末の土製玦状耳飾が、後述の如く石製品の擦切痕まで忠実に模しているという事実から推して、もし仮に椎骨を本当に模倣したものならば、もつとそれに近い形態に作っていたであろうことが容易に想像されるからである。従つて現在の資料では椎骨起源説は、柵倉に於ける16個中1個という例外的存在を考えるまでもなく全く否定的であるといえる。

しかしここで留意すべきことは、実は祖型と思われる土製玦状耳飾の中にこの種の形態が認められることである。これに就いては後述の予定である。

尚、脊椎骨を直接模した耳栓は、前述の如く後期に於ては非常に流行しているのである。

ⅠD型は中心孔が著しく大きく、丁度筒形を呈すもので、後期以降にあつては屢見出される形態である。そして中期には例外的に存在するといつても過言ではない程僅少である。僅かに柵倉に於ける2例(Fig. 3: 32)と、古く報告された宮城県青島<sup>36)</sup>に於ける第4号人骨の右耳附近から出土した、丹の塗布された1個があるに過ぎない。共に中期末に伴出した以上、祖型を究明するにあたつてはさして重要ではなからう。

ⅠE型は必ず中心孔を有し、縦長で片面が喇叭状にひらき、その面のみ彎曲するものである。

この型式に該当する耳栓は新潟県下の村杉<sup>37)</sup> (Fig. 3: 33, Pl. II: 16) 及び釜坂<sup>38)</sup> (Fig. 3: 36, Pl. II: 10) から出土しているに過ぎない。前者の場合は IA 型に伴出したもので勝坂式に比定され、中心孔が極めて小さく赤色顔料の塗布が認められる。後者の例は 4 個がそれぞれ一組で発見され、恐らく着装のまま埋没したと推定されているもので中期末に比定されている。総て中心孔が極端に大きく空洞になつており、全面に赤色顔料が塗布されている。実はこれらを村杉の耳栓と同一のカテゴリーに入れることには問題があると思われるが、一応便宜的に分類したに過ぎないことを付記しておく。

IIA 型は IE 型の中心孔が消失した形態で枋倉に於ける 8 個によつて代表される (Fig. 3: 34-35, 42-43, Pl. I: 11, Pl. II: 11-14)。ここで消失という言葉を取用した理由は、枋倉の 8 個中、片面にのみ刺突による小さな窪みのあるものが見出され、それは明らかに中心孔の消失していく過程を示している中間形態と考えられるからである (Fig. 3: 35)。

尚、大宮文化会館敷地<sup>39)</sup> から発見されたものは、枋倉からの将来品ではないかと疑いたくなる程酷似しているものであるが、安岡路洋氏によれば加曽利 E 式乃至後期初頭の称名寺式に伴出したそうである (Fig. 3: 39, Pl. II: 17)。

さて以上は中期末に伴うものであつたが、実は勝坂式に伴出した特異な耳栓が、都下中原<sup>40)</sup> から出土している。これは片面の径が極端に大きく、丁度高坏形を呈すもので全面が丹彩され、色調は黒味がかつている (Fig. 3: 38, Pl. II: 18)。この種形態をした耳栓は、他に類例がないため、遺憾ながら耳栓と見做して差支えないものかという肝心の点で判断に苦しむ。従つて枋倉や釜坂との系統的関係の有無に就いては皆目判らない。

IIB 型は IC 型の中心孔の無い形態を呈する。従つて IC 型と同様に椎骨起源説にとつては重要な形態であるが、中期の資料は僅少で 4 遺跡 4 個に過ぎない。

先ず幡谷<sup>41)</sup> の耳栓は径が 6 cm 以上もある大型品で、両面には貫通していない小孔とそれを囲む瓜形文及び沈線が認められる (Fig. 3: 37, Pl. II: 21)。時期は大木 9 乃至 10 式に比定されている。

一方、長野県平出<sup>42)</sup> の耳栓も無文ではあるが、同じく 5 cm もある大型品である。尤も坂井<sup>43)</sup> 出土の耳栓は、片面にのみ人間らしき文様の認められる特異なものであるが、小型品である (Pl. II: 19)。

その他枋倉から出土したものは、弯曲の程度の極めて弱いものである (Fig. 3: 40, Pl. II: 15)。

かつて、樋口博士は平出にみられるような形態の耳栓を以て基本型に想定されたのであるが、既述の IC 型と共にこの種耳栓は、後期加曽利 B 式の時期に流行した典型的なものであつて、中期には例外的にしか存在しないものであるといえる。

尚、平出及び坂井の耳栓は、勝坂式及び加曽利 E 式の大混合遺跡のため正確な時期の比定は困難である。しかし以上の事実から推して中期でも比較的後出であろうと思われるのである。

IIC 型及び IID 型は共に IA 型の中でも縦長で小型品の中心孔の無い部分に文様の施文された如きものである。文様の施文手法には明らかに 2 種あり、そこで刺突文によるものを IIC 型、隆線文によるものを IID 型と分類してみた。

前者は吉田格氏によつて御教示された都下恋ヶ窪と神奈川県青ヶ台<sup>44)</sup> の 2 遺跡 2 個がある

に過ぎない。共に両面に数10個の刺突があり、恋ヶ窪は勝坂式に、青ヶ台は加曽利E式に比定されている。

一方、後者の IID 型も高麗台<sup>45)</sup>の2個及び都内扇山<sup>46)</sup>の1個があるに過ぎない。高麗台のそれは2例共渦巻紋で勝坂式に (Fig. 3: 41, Pl. II: 20), 扇山の例は同心円文で加曽利E式に比定されている。

ところでこの IID 型耳栓は、後期にも存続し、例えば新潟県三十稲場<sup>47)</sup>, 和歌山県糸野<sup>48)</sup>, 更には遠く山口美濃ガ浜からも出土していることを小野忠熙氏より御教示を得た。これらは互に酷似しており、同一系統から生まれたものであることは疑問の余地がない。

尚、ここで留意しておきたいことは、IIC・Dの両型式共文様は中心孔の退化したものと解せられるのではなかろうかということである。何故なら共に中心孔にあたる位置に刺突、或いは渦巻によつて貫通こそしていないが、明らかにその痕迹と考へても差支えないようなものが表示されているのである。そこでもしこの推論が正しいとするならば、中期の耳栓は、古くは必ず中心孔を有したという持論の傍証となり得るであろう。

以上、中期の耳栓に就いてその出土地、時期、特徴、類例の分布状態、更には相互に於ける系統的関係の有無等を型式別に通観してきた。

本来ならば、耳栓の祖型を究明するという単にそれだけの目的であるから、最古の資料、換言すれば中期初頭の耳栓のみを調べればよいはずである。しかし実際にはこの時期の資料としては、音坊出土の1例があるに過ぎず、しかもまた次の勝坂式の資料となると大部分が次の加曽利E式を含んだ遺跡からの出土であるため、両者の厳密な区別は困難であるという現状である。そこで現在の段階では必然的に前述の如く中期に於ける耳栓を総て集成し、それらを比較検討するという方法をとらざるを得ない。

その結果、それらの中より何等かの共通した要素を抽出できれば、それが耳栓の母体である祖型につながる要素を内蔵していると解せられる以上、祖型の本来有していた形態の再現はある程度可能であると判断したのである。特にその共通性が広範囲に亘り、かつまたその要素が機能上或いは製作上不可欠のものではないにも拘らず、一貫した現象として認められるならば、それは決して偶然に生じ、一致したものではなく、何等かの意図が伏在している信憑性は高いといえるであろう。換言すれば、それは明らかに祖型の形態を示唆しているものであるというのが、この章に於ける私の見解である。

ではこれらの条件に充当する耳栓は何型であろうか。勿論、それは IA 型の耳栓であるといえる。そしてその他の型式はこの基本型が推移発展していく過程に於て、派生した変種に過ぎないであろう。このことは前記型式別記述の中で容易に理解していただけたものと思う。

即ち、IA 型は細部に於ては若干の差異があつた。しかし恰も鋭利な刃物で輪切りにされたかの如き両面の平滑という特徴は、機能上或いは製作上無関係にも拘らず一貫して認められ、しかもそれが決して単なる偶然によらないことは、中期耳栓の 55% を占め、また12県に亘つて分布しているという事実からも明白である。

多分、IA 型耳栓の平滑という特異な特徴は、この型式が祖型の伝統から、たとえそれが意識的にしろ無意識的にしろ、未だ抜出せない時期の所産であると解すならば、その不可解であつた画一性と共に説明がつくのである。その結果、IA 型及びその他の型式との比較分



Table 1 中期耳栓出土地名表

地名	時期	型式別数量										備考
		IA	IB	IC	ID	IE	IIA	IIB	IIC	IID		
1. 宮城県栗原郡一迫町日向	大木9— 10	2										左右対称の刺突文有り
2. “ 牡鹿郡稲井村南境	大木 9	2										左右対称の刺突文有り
3. “ 宮城郡七ガ浜村大木田	大木 7b ?	1										上下両面稍起伏す
4. “ “ 松島町 幡ヶ谷	大木10	1						1				IA 型左右対称の刺突文有り IIB 型文様有り
5. “ 登米郡南方村 青ヶ島	中期 ?			2								第4号人骨の1個は耳部, 1個は胸部から出土, 共に塗丹
6. 福島県信夫郡信夫村音坊	大木 7	1										
7. 茨城県常陸太田市磯部	?	2										
8. 千葉県千葉市月之木	加曽利E	1										中心孔にアワビ嵌入赤色顔料塗布
9. “ “ 巖立	加曽利E	1										第2号人骨耳辺より出土
10. “ 東葛飾郡沼南村 布瀬	阿玉台	1										
11. 東京都練馬区上神井扁山	加曽利E									1		
12. “ 太田区調布千鳥町	勝坂 ?	1										朱塗布
13. “ 小金井市貫井	加曽利E	1 ?										断面楕円形を呈し, 側面に渦巻文有り, 耳栓か判別し難い
14. “ 北多摩郡国分寺町 多喜窪	勝坂	1										丹塗布
15. “ “ “ 恋ヶ窪	勝坂								1			
16. “ 八王子市犬目町 中原	勝坂	1					1					IIA 型は丹塗布
17. 神奈川県横浜市磯子区 青ヶ台	加曽利E								1			
18. 山梨県韭崎市藤井町坂井	勝坂—加 曽利E	1	1					1				IIB 型は人面の如き文様有り
19. 埼玉県入間郡日高町 高麗台	勝坂	1								2		
20. “ 大宮市文化会館内	加曽利E						1					
21. 長野県諏訪郡富士見町 藤内	勝坂	2										赤色顔料塗布
22. “ 南佐久郡川上村 大深山	勝坂		1									朱塗布
23. “ 東筑摩郡宗賀村 平出	勝坂—加 曽利E							1				
24. “ 北山浦地方	?	1										
25. 山形県飽海郡遊佐町吹浦	中期 ?	1										
26. “ 村山市落合	大木7a —8a	1 ?										
27. 新潟県長岡市関原町馬高	加曽利E	9		1								
28. “ 栃尾市栃倉	加曽利E	3	1	1	2		8	1				

地 名	時 期	型 式 別 数 量										備 考
		IA	IB	IC	ID	IE	IIA	IIB	IIC	IID		
29. “ 中鮮沼郡津南町釜坂	加曽利 E					4					一對づつ出土，朱塗布	
30. “ “ 水沢村城倉	加曽利 E	2										
31. “ 北蒲原郡笹岡村杉	勝坂	1				1					IE 型は塗布	
32. 富山県魚津市天神山	勝坂			1								
33. “ “ 桜峠	勝坂		1									
34. “ 婦負郡呉羽村北代	中期？	1									早川氏蔵	
35. 岐阜県益田郡小坂町水口	加曽利 E	1										
36. 鹿児島県川辺郡知覧町石坂	塞の神	2									上面にのみ隆起線文及び朱塗布	
合 計		42	4	5	2	5	10	4	1	3		

析から、耳栓の祖型は次の如き特徴を具備したものであつたと想像される。

- (1) 扁平・円型にして必ず中心孔がある。
- (2) 両面が極めて平滑である。
- (3) 両面の径が等しい。
- (4) 赤色顔料の塗布から推して赤色と何等かの関係がありそうである。

要するに耳栓の祖型は、以上の条件を満足させるものでなければならぬわけで、椎骨製耳栓とは両面の平滑と弯曲という著しい差異があり、我々は新しく別の方面に祖型を探究する必要のあることに気付くのである。

そこで先ず想起されるのが、未開人の間で屢使用されている竹製耳栓である。しかし御存知の如く、竹は中心孔が極めて大きく筒形であるため、両者の間には相当なへだたりがあるといえる。

然るにこの条件に正に充当する答が、意外にも系統的相違が介在するとさえ考えられていた玦状耳飾、正確に言えば土製玦状耳飾の中にひそんでいたのである。そこで次にその土製玦状耳飾に就いて述べてみよう。

### 3. 土製玦状耳飾

耳栓の出現しない中期以前の耳飾としては、周知の如く玦状耳飾があつた。これは中国古代の佩玉の一種である玦に類似しているため附けられた名称で、普通扁平、環状にして外縁から中心孔に達する切れ目が1個所あり、この切れ目をつかつて穿孔された耳朶に挿入される、所謂垂下式耳飾と考えられるものである。

最古の例として早期中頃の花輪台式に伴出した猪牙製の破片が報告されているが、異論を唱える学者もあり、一般にはまだ容認されていない<sup>49)</sup>。従つて確実な資料としては、前期初頭の花積下層式からであるといえる。花積下層式に伴出する最古の玦状耳飾は、古墳時代の金環の如く肉が一般的に太いという傾向があり、私はかつて雄猪の犬歯を以て祖型とする卑見を述べたことがある<sup>50)</sup>。

さて、前期後半の諸磯式の時期になると、肉が薄く扁平になり、ここに所謂玦状耳飾の典

型的な形態が完成し流行するのである。そして中期以降になると円形であつた形態や石製であつた材質に変化を生じつつ激減していく。これら瑛状耳飾に就いては、他の機会に詳述の予定であり、本稿では中期耳栓の出現直前に限つてのみ見出される特異な土製瑛状耳飾に就いて述べることにする。

瑛状耳飾は前述の如く石製品が一般的であつたが、諸磯式の後半、厳密に言えばその中でも所謂浮島式文化、或いは多少の差はあれこの型式の土器を含んだ遺跡から土製瑛状耳飾が見出されるのである。

従つて土製瑛状耳飾の発生に浮島式系文化を担つた人々が、何等かの役割を果したであろうことは想像に難くない。

この土製瑛状耳飾の出現した理由に就いては、西村正衛氏<sup>51)</sup> (1960) が茨城県向山及び興津貝塚に於ける該種遺物の発見より「石材の原産地に遠く距つた地域にあつた社会集団の間では、土製品によつてその意欲を満たそうとした意図の結果的所産であつたと解される」と甚だ興味深い説明をなされている。

しかし滑石の原産地長野県<sup>52)</sup>に接する山梨県花鳥山に於ても2個出土し、しかもそれが時期的にも後出でないという事実は、如何に解釈すべきであろうか。またもし単に石材の入手困難にのみ起因するならば、当時既にかんりの発達を示した骨角製等の代用品もあつてしかなるべき筈なのに皆無であるという疑問も残る。

思うに石製品を土製品に代えた理由には、粘土の方が石より入手し易いということもさることながら、製作方法が石に比して簡単であること、勿論これには土製品の製作技術の進歩が前提におかれているのであるが、殊に文様の細工が加え易かつたという点も、たとえ二次的な理由であつたにせよ無関係であつたとは思われないのである。

例えば栃木県丸山<sup>53)</sup>の土製瑛状耳飾には、格子目状の細かい篋描沈線と竹管による刺突文がつけられているし、近時、山内清男博士の御好意により実見させて頂いた、未発表の資料である茨城県貝ヶ窪出土の中にも文様の施されたものがあつた。

尚また石製品中にも千葉県加茂<sup>54)</sup>に於ける諸磯式に伴出した滑石製瑛状耳飾の如く周縁に17個の刻目のつけられた例がある。以上のことから当時両面及び周縁に文様をつけることのアつたことが判る。唯、はじめ石製品の方におこなわれていたものが、土製品に影響したのか、或いはその逆であつたかという問題になると資料不足で確定的なことはなにもいえないが、しかしこのためには細工し易い土製品の方がより好まれるであろうことだけは明白であろう。

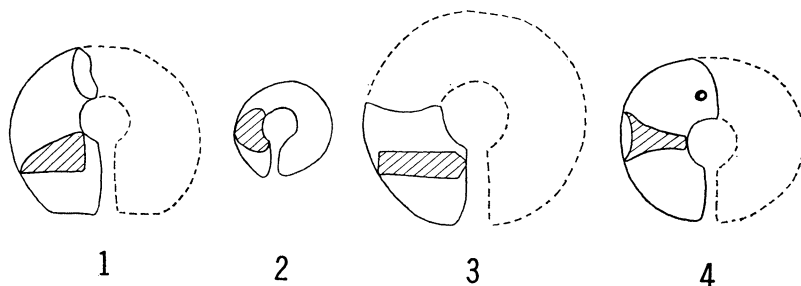


Fig. 4 土製瑛状耳栓実測図 (1/2)

尚、福島県台の前<sup>55)</sup> (Fig. 4: 3 及び Fig. 5), 及び栃木県木下<sup>56)</sup> (Fig. 4: 4 及び Fig. 6)

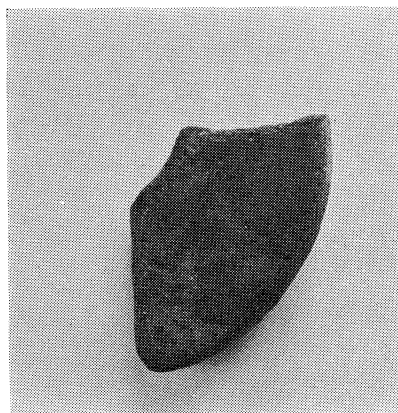


Fig. 5 台の前出土のC型土製珓状耳飾 (1/1)

出土の土製珓状耳飾には、赤色顔料が塗布されているが、これは石製品には不可能のことであり、この点も土製品の普及に一役買ったであろう。

さて知見では土製珓状耳飾は11遺跡17個発見されている。時期は総て前期後半の諸磯式に属すものである。

1. 福島県相馬郡小高町台の前
2. 茨城県稲敷郡浮島村貝ヶ窪
3. 茨城県稲敷郡美浦村興津
4. 茨城県北相馬郡取手町向山
5. 栃木県那須郡烏山町中山<sup>57)</sup>
6. 栃木県那須町高久丸山
7. 栃木県那須郡那須町伊王野木下
8. 山梨県東八代郡花鳥村

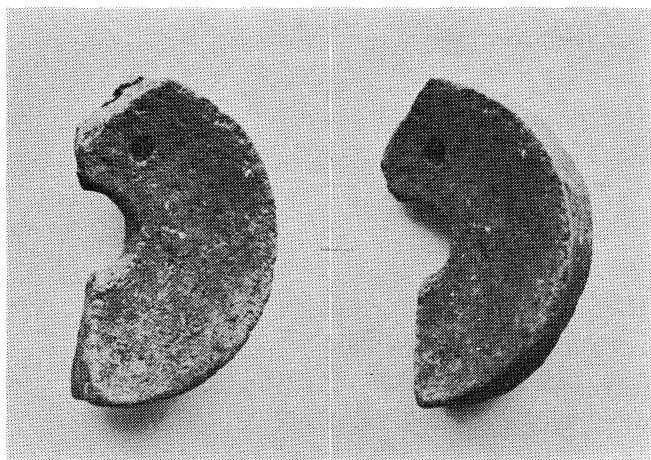


Fig. 6 木下出土のD'型土製珓状耳飾 (1/1)

であるが、山梨県花鳥山<sup>58)</sup>の2個、貝ヶ窪<sup>59)</sup>の6個という例もある以上、発掘調査の不十分ということも一応考慮する必要がある、実際はかなり普及していたことが予想されるのである。

形態は総て円型であつて、中期以降にあるような変形はない。唯、石に比して原料が手軽に入手できるため、大型化の傾向はある。

例えば台の前出土の土製珓状耳飾は破片ではあるが、完全な時には径が6cm以上はあつた筈である。従つて神奈川県南堀及びグムヌキ谷所<sup>60)</sup> (Fig. 4: 2, Pl. II: 22)の径2.5cm及び2.7cmという超小型品を除外すれば、総て大型品であるといえる。

ところでこれらを詳細に観察すると、石製珓状耳飾の擦切痕を忠実に模していることに気付く (Fig. 4: 30)。このことより土製珓状耳飾が石製品を模倣してできたものであることがよく判る。

さて既述の如く土製品は石製品に比して加工が甚だ容易であるため、機能上不可欠の切れ目及び中心孔を除けば、変化を受け易い。就中、それは両面及び側面に於て著しい。そこで

9. 神奈川県横浜市港北区  
南山田町南堀
  10. 神奈川県横浜市神奈川  
区上管田町グミヌキ谷所
  11. 千葉縣市川市曾谷向台
- 以上が土製珓状耳飾の出土地名であるが、先ず分布が栃木・茨城両県を中心に比較的限定されている点に注目せねばならない。これはIA型耳栓の分布圏から日本海側を除外したものと大略一致する。

出土数は1遺跡1個が普通

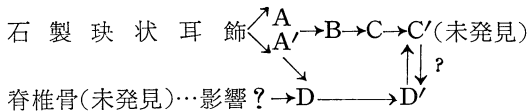
これらの点から便宜上次の如き 7 型式に分類してみた。

- A 型——周縁が◻状で鈍い両刃の如き形態を呈す。
- A' 型——周縁が◻状で鈍い片刃の如き形態を呈す。
- B 型——周縁が◻状で半球状に近き形態を呈す。
- C 型——周縁が◻状に角ばっている。
- C' 型——C 型の周縁が◻状に括れている。
- D 型——C 型の両面が◻状に弯曲している。
- D' 型——D 型の周縁及び両面が◻状に括れている。

A・A' 型は同時期の石製瑛状耳飾にみられる形態であるが、その他の型式は土製瑛状耳飾にのみ認められる特質である。尤も B 型と近似した形態の石製瑛状耳飾は、前期初頭のそれに求められるが、この時期には皆無である。

思うにこれら 3 型式以外の土製瑛状耳飾は、石製瑛状耳飾が擦切手法によつて切断され、しかも土製瑛状耳飾がそれを忠実に模している限り、生じる可能性の殆んどないものといえる。換言すれば、同時期の石製瑛状耳飾を直接模したことの明らかな A・A' 両型式の土製瑛状耳飾は、その他の型式に比して、たとえ僅かであつても時間的に古いものであるといえよう。

そこで型式学的には次の如き発展系列が想定されるのである。



但し型式に関係なく擦切痕の認められるという事実は、この発展系列が時間的に殆んど差のない中で想定されたものであることを示している。

石製瑛状耳飾を直接模造した A・A' 型は扁平であつたが、製作が自由なためこの制約から解放され、肉が徐々に厚くなり、遂には B 型となる。次にこの周縁に丸みをつける面倒は省かれ、角ばらせるという整形し易い方法をとる、それが C 型である。

然るに材料が石より、自由に豊富に入手できるため大型品をつくるようになり、それに比例して重量が増すので軽減する工夫が必要になる。そこでこの目的のため考案されたのが、両面を弯曲させた D・D' 型ではなからうか。尤もこの特徴に就いては、椎骨との関係も、たとえ耳飾としてのそれが未発見のため否定的であると雖も、一応考慮に入れておく必要がある。というのは椎骨を耳栓の祖型とすることは時代・場所を問わず一般的現象であり、特に我国に於ては中期ではあるが、耳栓としてではなくてもその加工品が見出されている以上、間接的にしろ、その影響を受ける可能性もあるわけで、今後この点は問題になる点であろう。

ここで我々は D' 型の周縁に注目しなければならない。即ち、D' 型の周縁は著しく括れ、明らかに耳栓としての機能を有していることである。これは既述の如く栃木県木下に於て諸磯式の遺物と伴出したもので、破片ではあるが、確実に切れ目を有し、発掘者渡辺竜瑞氏は、瑛状耳飾として報告されている (Fig. 6)。特にこれの上部にある貫通された小孔は、焼成前にあけられたものであるが、これは石製瑛状耳飾が破損した場合、屢接合するためつけられるもので土製瑛状耳飾には不必要なものである。従つてこのことより D' 型は石製瑛状耳飾を直接模造したものであることが判る。更にまた、このことは D' 型がたとえ両方の要素を

有したものであつても、どちらかといえば玦状耳飾としての機能が主で、耳栓としての機能の方が従であると解釈できそうである。換言すれば、D'型はそれまで行われてきた玦状耳飾としての使用法に、耳栓としての新しい用法を加えた画期的な新型式であるといえよう。

この結果、ここに耳栓の祖型は土製玦状耳飾であることが判明した次第であるが、実のところこれで全てが解決したというわけではない。

何故なら、前章の中期耳栓の比較分析に於て、耳栓の祖型は両面が平滑な特徴を有したものであることを明らかにしているのである。これに対して D'型は両面が彎曲し、両者の間には著しい差異が認められるのである。

そこでどうしてもその存在が予想されるのが、仮に設定した C'型である。これは両面は平滑であるが、周縁は括れ耳栓としての機能を有したものである。

この型式の耳飾の存在は、中期耳栓の研究から推しても殆んど確定的なものであるといえるのである。

そこで気付くことは、C'型土製玦状耳飾がIA型耳栓に、またD'型土製玦状耳飾がIC型耳栓に類似しており、就中、前者は完全に一致しそうなことである。ここで章を改め、次に両者の関係に就いて述べよう。

#### 4. 結 語

耳栓の祖型の特徴は、先ず(1)扁平・円型にして必ず中心孔を有するということであつた。然るに土製玦状耳飾は、必ず扁平・円型にして機能上切れ目及び中心孔がつけられていた。従つて切れ目を除けば、両者は完全に一致する。

(2)の特徴は両面が極めて平滑であるということで、これは耳栓の祖型を究明する上に重要な鍵であつた。

然るに石製玦状耳飾の特徴である両面を磨研するという手法を忠実に模した土製玦状耳飾の両面は、全く平滑であり、これによつて12県に亘つて認められたIA型耳栓の両面に見られる、恰も鋭利な刃物で輪切りにされたかの如き平滑という特異な特徴の謎も解けたわけである。

(3)の特徴は両面の径が等しいということであつた。

これは扁平が原則である玦状耳飾にあつては当然のことであり、少しも矛盾しない。

そこで最後に(4)の特徴は赤色と何等かの関係があつたのではなからうかということであつた。

然るに福島県台の前出土のC型及び栃木県木下出土のD'型土製玦状耳飾には、明らかに赤色顔料塗布の痕跡が認められ、土製玦状耳飾にあつては赤色顔料が屢塗布されていたことが窺われるのである。

特に中間型式と思われるD'型土製玦状耳飾にこれが認められるという事実は、中期耳栓にみられる赤色顔料塗布が、土製玦状耳飾の伝統を継続したものであることを示唆している点で重要である。

以上のことから耳栓の祖型は、従来唱えられてきたように椎骨に由来するのではなく、意外にも異系統とさえ考えられてきた所謂垂下式の玦状耳飾、厳密に言えば土製玦状耳飾から派生した一変種に過ぎないことがここに判明したのである。

この結果、IA 型に履みられた両面の傾斜という特徴も、例えば A・A'・B 型等の土製玦状耳飾の両面を忠実に模したものであるということが判れば簡単に納得ができるのである。

耳栓は恐らく前期末諸磯式の後半、例えば茨城県向山の如く浮島 III 式、から中期初頭の五領ケ台式の時期にかけて浮島式系文化を担った人々によって Fig. 7 に示すような過程を経て、土製玦状耳飾から派生したものであろう。

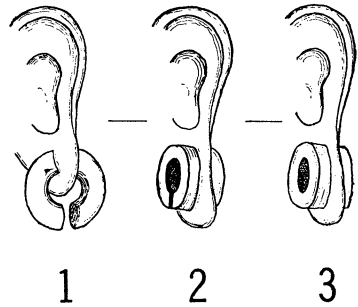


Fig. 7 耳栓発生想定図

即ち、石製玦状耳飾の切断は必ず擦切手法によつたため、周縁は必然的に刃先の如く薄くならざるを得なかつた。然るに土製玦状耳飾になるとこの制約から解放され、厚みを帯びようになり、遂には C・D 型土製玦状耳飾にみられるような形態を呈すにいたつた。

そしてもしこの種の玦状耳飾を耳朵の穿孔部に耳栓の如く嵌入するならば、たとえ不充分であつても、ある程度の保持は可能であろう。

更に次には一層確実に保持するため、周縁を括すという工夫がなされるであろうことは、容易に想像されそれが C'・D' 型土製玦状耳飾である。

尤も周縁をこのように括すという前に起伏をつけて滑り落ちないようにする段階があつたかもしれないことが栃木県高久の例より推定される。

要するにこの新しい着装法、即ち耳栓は人々の好みにあい、玦状耳飾に代つて使用されることになつたのであろう。勿論、この過程に於て既に不必要となつた切れ目は自然に消滅していったであろう。

しかしながら以上の推論が証明されるためには、玦状耳飾であつて耳栓であるという、両者の機能を有した、謂わば過渡的な中間形態の耳飾が発見されねばならない。

幸い栃木県那須町木下出土の D' 型土製玦状耳飾は、正にこの条件を満たすものであつた。これは浮島式土器を含んだ諸磯式に伴出したものであるが、唯、諸磯式の中の如何なる型式に所属するものであるかに就いては明らかでない。また同遺跡からは、中期初頭の五領ケ台式土器も伴出しており時期的には何等問題はない。

しかしここで留意しなければならぬことは、既述の如く両面の弯曲した D' 型土製玦状耳飾は、耳栓の祖型を忠実に示していると考えられた、両面の平滑な IA 型耳栓と結びつかないということである。

従つて IA 型耳栓が直接結びつくものとしては、未発見ではあるが、どうしても両面の平滑な C' 型土製玦状耳飾の存在が予想されるのである。

これに対して両面の弯曲した IC 型耳栓との関係が考えられるのであるが、しかし既述の如く耳栓の祖型は IA 型耳栓が示す特徴を有したものであつて決して IC 型耳栓の如き特徴を有したものでないことが判明した以上、たとえ両者に親縁関係があつたとしてもそれは謂わば例外的な変化であるといわざるを得ない。

しかしそうはいふものの実際には、C' 型土製玦状耳飾が発見されず、D' 型土製玦状耳飾のみが認められる今日にあつては、次のような二通りの型式的変遷過程が想定されねばなら

ないであろう。

(1) は  $C'$  型土製玦状耳飾の存在を前提にしての推論であるが、これが  $IA$  型耳栓に発展する。

(2) は仮に  $C'$  型土製玦状耳飾が将来発見されないものとしての推論であるが、多分、那須地方に於て  $D'$  型土製玦状耳飾を最初として新しい着装法、即ち耳栓が発生し、これが人々の好みにあつて、垂下式に代つて各地に流行していった。

しかし当時の人々は、耳栓が玦状耳飾から派生した一変種に過ぎないことを知っていた結果、意識的にしろ無意識にしろ、祖型である玦状耳飾の特徴を忠実に守つて耳栓をつくつたので、ここに石製或いは土製玦状耳飾の四つの特徴を有した  $IA$  型耳栓が各地に生まれることになつたのであろう。

しかし現在の資料では、一体どちらの推論がより高い蓋然性を有しているか推断し難い。

しかしいずれにせよ耳栓の起源が、従来容認されてきたような魚類の椎骨に由来するものではなく、土製玦状耳飾から派生したものではなかろうかという一試論を披瀝する次第である。

従来、耳栓を以て南方から我国に流入した文化要素の痕迹を示すものとする傾向があつた。然るに南方地域の耳栓の歴史を詳細に調べてみると、我国中期のそれに対比できる程、古い類例はみられず、極端ないい方をすれば、我国からの伝播は考えられても、その逆は成立し難いとさえいえるのである。従つてここに我国縄文時代の耳栓は、我国に於て自生したものであることが判明した次第である。

最後にこの論稿のため御指導下さつた江坂輝弥先生、英文の作成に協力下さつた荻田朝雄、小池透両氏、また実測図製作の労をとられた長友渡辺誠氏に対し深甚な謝意を表します。

更にまた氏名は記さなかつたが、貴重な資料の使用を快く許して下さい下さつた方々の御助力も忘れることはできません、心から感謝する次第です。

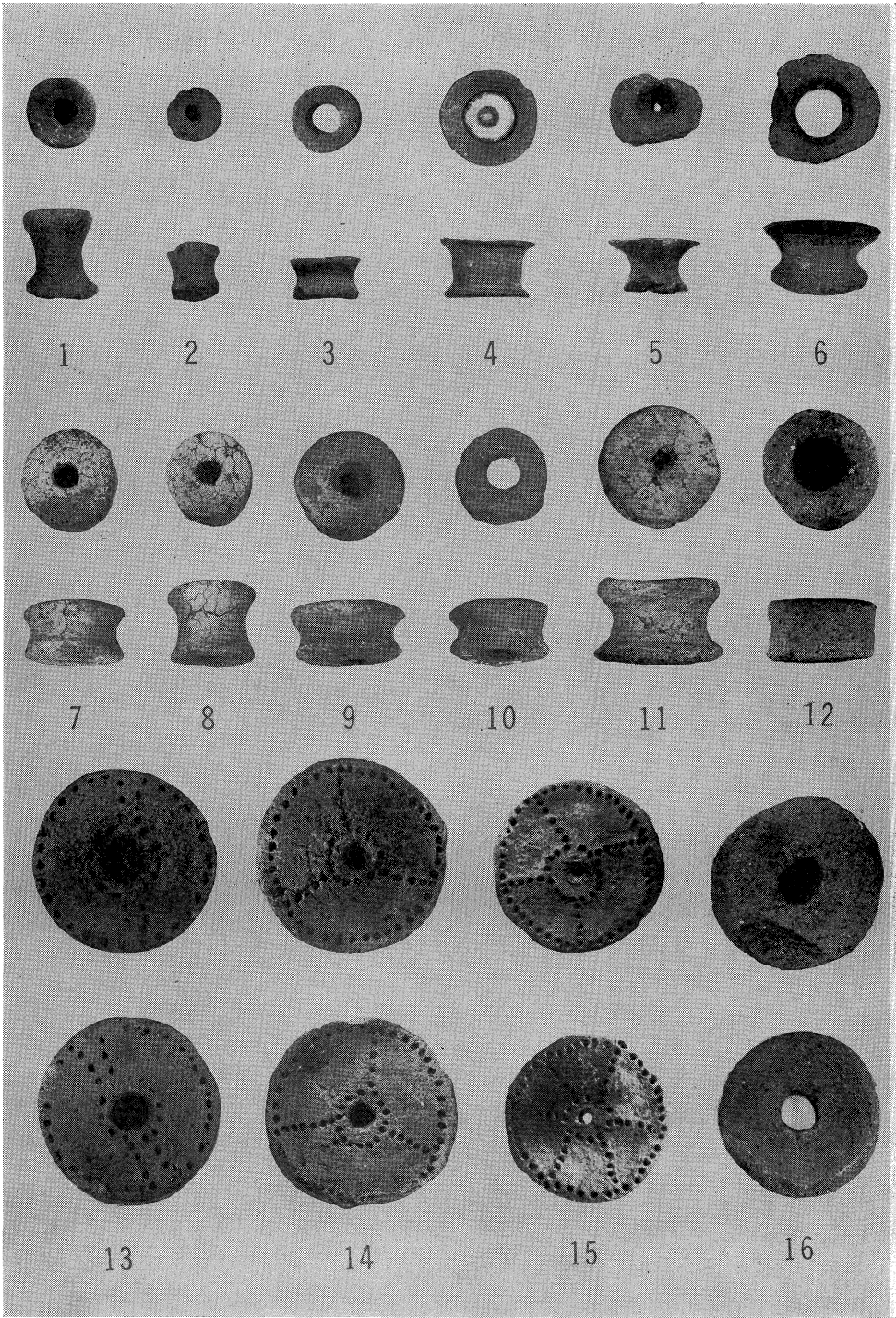
付記。愛知県入海貝塚<sup>61)</sup>に於ける、早期入海層乃至粕畑層中より耳栓らしき土製品が3個出土した。形態は中期の耳栓とは全く異なり、後期の耳栓に類似しているものである。遺憾ながら今日までのところ他に類例がないため、これ以外のことは何も判っていない。唯、ここでいえることは玦状耳飾の出現と並行するか或いは先行してヘアーピンの如き棒状の耳飾—広義に解せば耳栓の一種であるが—の存在の予想されることである。というのは玦状耳飾の祖型である雄猪の犬歯を耳朶の穿孔部に嵌入させるためには、ヘアーピンの如き器具が穿孔のために必要であり、そしてそれがまた屢々耳栓の一種として使用されていることは、未開人の例をみれば直ちに気付くことである。

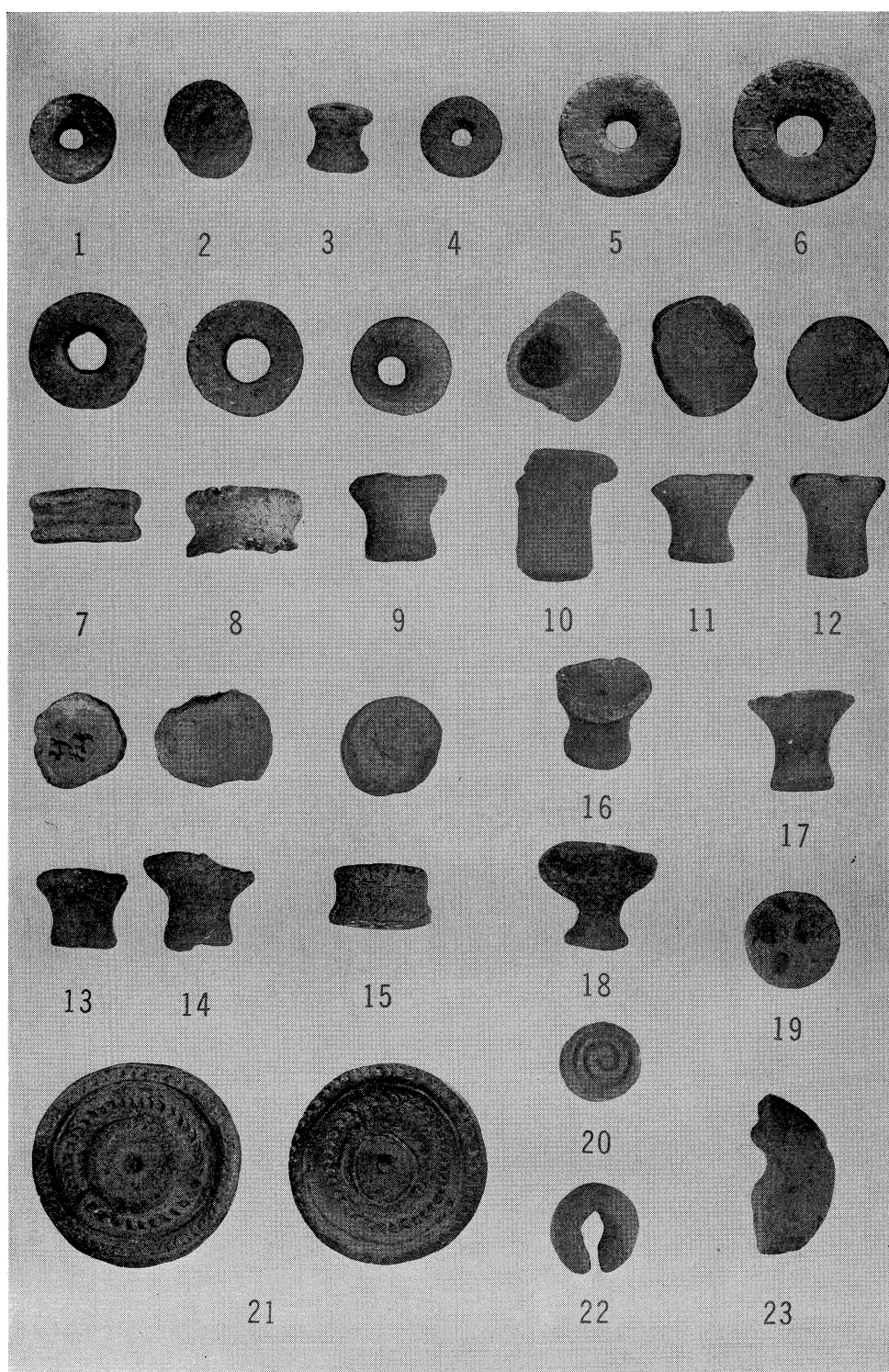
従つて前期の玦状耳飾の流行以前に、中期の耳栓とは無関係な耳栓がヘアーピンの如く穿孔具から発展して存在したとしても何等不思議はないわけである。

唯、この種耳栓は、たとえ存在していたとしても、前期には既述の如く玦状耳飾の流行によつて消滅したであらうから、中期以降の耳栓の祖型とはなり得ないわけである。

尚、この点は今後、新資料の増加によつて予想もし得なかつた事実が明らかになる可能性が非常にあるといえる。







## 註

- 1) 鳥居竜蔵, 1924: 諏訪史, 第1巻, 236~237頁。
- 2) 樋口清之, 1941: 滑車形耳飾考。考古学評論, 第4輯, 57~80頁。
- 3) 小林行雄, 1957: 日本考古学概説。40頁。
- 4) 金子浩昌, 1961: 印播手賀一両沼周辺地域埋蔵文化財調査一。早稲田大学考古学研究報告第8冊, 150~181頁, 第25図。
- 5) 八幡一郎編集, 1959: 世界考古学大系第1巻, 日本1—先縄文・縄文時代一(平凡社刊)グラビア75。
- 6) 西村正衛・金子浩昌, 1956: 千葉県香取郡大倉南貝塚。古代第21, 22合併号, 1~47頁, 7図9, 10, 11。
- 7) 江坂輝弥, 1960: 土偶。第27図7。
- 8) 松本彦七郎, 1930: 陸前国登米郡南方村青島介塚調査報告。東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告第9号, 20頁。40頁。
- 9) 武田宗久, 1951: 千葉県千葉市蔵立貝塚。日本考古学年報4, 75~76頁。
- 10) 江坂輝弥, 1960: 前掲書。273頁。
- 11) 近藤勘次郎・近藤篤三郎, 1936: 越後馬高遺跡と滑車形耳飾。考古学7—10, 478~483頁。
- 12) 吉田格, 1952: 東京都国分寺町中期縄文式住居跡調査概報。武蔵野特集国分寺号, 48~55頁。
- 13) 八幡一郎, 1960: 長野県南佐久郡大深山遺跡調査(第1回)。信濃12—8, 445—452頁。
- 14) 志村滝蔵, 1965: 坂井。図版第33の163。
- 15) 鳥居竜蔵, 1924: 前掲書。231~237頁。
- 16) 渡辺忠胤, 1963: 八王子市中原遺跡調査報告。多摩考古5, 8~18頁。
- 17) 藤森栄一・武藤雄六, 1962: 信濃境大花第2第3堅穴調査概報—耳栓製作者の家—。信濃14—7, 453~469頁。尚, 同書には加曽利E式初頭と報告されているが, 武藤氏に直接伺った所では, 勝坂式の最末期かもしれないそうである。
- 18) 井上郷太郎, 1962: 井上コレクション考古資料図録。図135。
- 19) 中根君郎, 1932: 小さな採集壺。ドルメン3—8, 618頁第1図。尚, 酒詰仲男, 1959: 日本貝塚地名表。107頁によれば同貝塚からは勝坂・加曽利B式土器が出土している。
- 20) 金子浩昌, 1961: 布瀬貝塚。前掲書所収, 150~181頁。
- 21) 樋口清之, 1941: 前掲書。第8図221。
- 22) 吉田格, 1958: 東京都小金井町貫井遺跡調査報告—縄文中期堅穴住居跡—。武蔵野38—1, 20~27頁。
- 23) 大江錦舟, 1957: 飛騨小坂町水口遺跡の遺物。史想第7号, 20~23頁。但し実測図は送って頂いた。
- 24) 河口貞徳, 1955: 南九州出土の条痕土器—吉田村及び知覧町遺跡—。石器時代1号, 52~54頁。図版V3。但し実測図は送って頂いた。
- 25) 未発表の資料であるが, 興野義一氏の特別な御好意により載せさせて頂いた。
- 26) 江坂輝弥, 1964: 装身具。日本原始美術2所収, 147~149頁。図版178。但し東北大学蔵。
- 27) 江坂輝弥, 1964: 前掲書。148頁。
- 28) 実は類例が古くから著名な宮城県沼津貝塚, 青森県是川, それに近時樋口清之博士の御好意によつて実見させて頂いた茨城県福田貝塚に於て見出される。しかしながら, これらの遺跡は後期から晩期に属するものであり, もし確実に後期の層位中から出土したとするならば, 後期でも初頭に属するものであろう。沼津貝塚の耳栓に就いては, 東京国立博物館編, 1953: 日本考古図録。朝日新聞社刊, 94の右上。また樋口清之, 1941: 前掲書。第1図左下2番目。尚, 是川及び福田の例は実見した所, 甚だ粗製であり, 従つて宮城県附近が中心であつたと思われる。
- 29) 武田宗久, 1951: 前掲書。75~76頁。
- 30) 武田宗久, 1951: 千葉県千葉市月之木貝塚。日本考古学年報4, 74~75頁。
- 31) 近藤勘次郎・近藤篤三郎, 1936: 前掲書。476~483頁。しかし長岡市立博物館には14個あるし, また原田淑人, 1963: 古代人の化粧と装身具。図版110に馬高出土と思われる4例が近藤勘治氏所蔵として示されており, 実際には14個以上といえよう。

- 32) 栃倉市教育委員会, 1961: 栃倉。96頁。  
 33) 富山県教育委員会・魚津市教育委員会, 1961: 桜峠遺跡調査報告書(上)。図版 48。  
 34) 志村滝蔵, 1965: 前掲書。図版第 33の164。  
 35) 富山県教育委員会・魚津市教育委員会, 1959: 天神山遺跡調査報告書。12頁, 実測図2の8。  
 36) 松本彦七郎, 1930: 前掲書。20頁及び40頁。  
 37) 北方博物館蔵。  
 38) 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会, 1962: 上野遺跡。津南町文化財調査報告 4, 77~78頁。  
 39) 大宮文化会館蔵。  
 40) 渡辺忠胤, 1955: 八王子子犬目町中原遺跡発掘報告。多摩考古 2, 22~29頁。  
 41) 江坂輝弥, 1964: 前掲書。図版 178。  
 42) 平出遺跡調査会, 1955: 平出。153頁。  
 43) 志村滝蔵, 1995: 前掲書。106頁。  
 44) 佐野大和, 1943: 横浜市青ヶ台の石器時代遺跡。古代文化 14-7, 232~250頁。  
 45) 大宮文化会館蔵。  
 46) 矢島清作・村主誠一郎, 1940: 東京都上石神井扇山の平地住居遺跡。考古学雑誌30-2, 121~139頁。  
 47) 近藤勘次郎・近藤篤三郎, 1936: 前掲書。478~483頁。尚, 水野清一・小林行雄, 1959: 図解考古学辞典。410頁に於て三十稲場の耳栓を以て馬高としているが誤りである。  
 48) 和歌山県教育委員会, 1955: 和歌山県有田郡生石村生野遺跡。紀伊考古図録所収, 9頁, 第8図B 1, B2, B3。  
 49) 江坂輝弥, 1957: 先史時代(II)-縄文文化-。考古学ノート 2, 133頁。  
 50) 高山純, 1963: 四国で発見された玦状耳飾。あるかいあ第2号, 3~6頁。  
 51) 西村正衛, 1960: 利根川下流域における縄文中期の地域的研究(予報)。古代第34号, 1~32頁。  
 52) 藤沢宗平, 1963: 縄文文化の滑石製品。古代第39・40合併号, 50~66頁。  
 53) 沢四郎, 1959: 大珠と土製玦状耳飾の新例。考古学雑誌 45-1, 67~70頁。第2図。  
 54) 三田史学会, 1952: 加茂遺跡-千葉県加茂独木舟出土遺跡の研究-。考古学・民族学叢刊第1冊, 32頁。第10図, Plate 4の14。  
 55) 志賀顕竜氏蔵。  
 56) 渡辺竜瑞, 1954: 栃木県那須郡伊王野村木下遺跡調査概報。白桃第26号, 43~69頁。  
 57) 義煎平佐氏蔵。  
 58) 1個は国学院大学蔵。尚, 松田保彦氏の御教示によれば, 他に完形品1個が発見されているという。  
 59) 山内清男博士の御教示による。  
 60) 伊勢田進, 1951: 新発見の土製玦状耳飾。上代文化第20輯, 72頁。  
 61) 中山英司, 1955: 入海。愛知県東浦町文化財保存会, 49頁。図版11の14, 15, 16。

(慶応大学文学部考古学研究室)

### 挿 図 解 説

Fig. 2

- |           |             |          |             |           |
|-----------|-------------|----------|-------------|-----------|
| 1~4. 馬 高  | 5. 音 坊      | 6. 多 喜 窪 | 7. 坂 井      | 8. 高 麗 台  |
| 9. 中 原    | 10. 藤 内     | 11. 磯 部  | 13. 布 瀬     | 14. 水 口   |
| 15. 石 坂 上 | 16. 日 向     | 17. 幡 谷  | 18. 蕨 立     | 19. 月 之 木 |
| 20. 村 杉   | 21. 22. 栃 倉 | 23. 大 木  | 24. 25. 城 倉 | 26. 北 代   |

Fig. 3

- |              |             |         |           |             |
|--------------|-------------|---------|-----------|-------------|
| 27. 坂 井      | 28. 大 深 山   | 29. 栃 倉 | 30. 馬 高   | 31. 32. 栃 倉 |
| 33. 村 杉      | 34. 35. 栃 倉 | 36. 釜 坂 | 37. 幡 谷   | 38. 中 原     |
| 39. 大宮文化会館敷地 |             | 40. 栃 倉 | 41. 高 麗 台 | 42. 43. 栃 倉 |

## The Origin of Ear-Ornaments in Japan's Jomon Culture Period

Jun TAKAYAMA

In some parts of the world people still observe the custom of wearing ear-ornaments in an artificially created perforation in the ear lobe. In Asia, such a custom is primarily confined to areas of Burma, Malay, Indonesia, New Guinea, Philippines, Formosa and in some regions of Eastern Asia. Although this custom is not practiced today in China, Korea or Japan, evidences of the fact that this custom did exist in these countries in early times have been proved by archaeologists through numerous examples of ear-ornament artifacts excavated in these countries in recent years. Japan, in particular, has divulged a wide variety of Jomon period ear-ornaments in varied sizes and shapes.

In reference to the specific types of Japanese ear-ornaments under discussion in this paper, Dr. R. Torii, in 1924, first surmised that ear-ornaments originated with the use of fish vertebrae. In 1941, Dr. K. Higuchi, based on typological analysis of a wealth of research material on this subject, supported Dr. Torii's thesis and dated the appearance of this type of ear-ornament to the Middle Jomon culture period.

Since the end of World War II, many studies have been made in determining the origin and chronological position of these ear-ornaments in Japan. Recent findings indicate that there is little evidence to support the assumption that ear-ornaments made of fish vertebrae originated in the Middle Jomon culture period as advanced by Dr. Higuchi. It is more reasonable to assume that they are the products of the Later or Latest Jomon culture periods.

From what prototype was the ear-ornament derived? In order to give a reasonable explanation to this subject, it is necessary first to seek out the earliest ear-ornaments known to us: the ear-ornaments of the Middle Jomon culture period (4513 B. P.  $\pm$  300). From these examples it may be possible to obtain knowledge of common elements which points up traits inherited from the prototype.

Examples cited in this paper are based on seventy-six (76) ear-ornaments excavated from thirty six (36) sites located in various parts of Japan. General dimensions of these objects range from 2 cm to 4 cm in diameter and 1 cm to 2 cm in thickness. These ear-ornaments are divided into nine (9) types irregardless of variations in their forms, based upon features of the surface of both sides. Chronological and typological analysis places stress on the importance of Type I A, one among the nine (9) types mentioned above. The characteristic of Type I A is the overall smoothness of the surface of both sides of the individual ear-ornament. Although this trait is not essential to either manufacture or function of the ear-ornaments, 55% of all ear-ornaments excavated from Middle Jomon culture sites are of this type. Sites from which these ear-ornaments were excavated are widespread throughout twelve (12) prefectures, from Miyagi Prefecture on the north to Kagoshima Prefecture on the south and including the central Kanto and Chubu regions.

From study of numerous Type I A examples we may assume that the smooth

surface of Type I A was not made by accident but were intentional. We may also consider that Type I A undoubtedly suggests features of the prototype which were disc-shaped with a small perforation in the center. Many of these prototypes were also coated with red pigment.

It is also evident that the overall smoothness of the surface of both sides of Type I A ear-ornaments is distinguishably different from the concave surface of fish vertebrae. The traits of Type I A show close resemblance to the so-called "split ear-rings" made of clay, which were common in the period preceding the emergence of ear-ornaments of the type under discussion. Since the surface texture of both, the ear-ornaments of Type I A and the ear-rings of the preceding period, resemble each other very closely, we cannot ignore their close relationship.

Ear-ornaments of the period preceding the Middle Jomon culture era were, generally, thin and made in the form of a circular, split, ear-ring attached to and hung from a perforation in the ear lobe. The earliest examples of this type, from the beginning phases of the Early Jomon culture period, were usually made of stone (though later replaced with clay frequently coated with red pigment), polished on both sides. Seven (7) types of clay "split ear-rings" are recognized chiefly based on their slit or cutout portion. It is believed that transition from the "split ear-ring" to the type of ear-ornament in question followed the evolution pattern indicated in Figure 7, since clay can be readily shaped to any desired form. The interior edge of the clay ear-rings was probably sharp at first similar to their stone prototypes. These were subsequently rounded out and eventually made thick in form; thick enough to fit inside the perforation in the ear lobe. Though probably ill-fitting at first, the sides of the ear-ornaments were eventually made concave in form, making them more stable when fitted in the ear lobe. In this manner, the ear-ornaments finally replaced the "split ear-rings". The slit in these disc-shaped ear-rings also disappeared in the process of transformation, although the practice of smoothing and polishing the surface continued as before.

In order to further strengthen the assumption and hypothesis regarding the origin and evolution of these ear-ornaments, artifacts representing the intermediary form of the ear-ornament were required as supporting evidence. Fortunately, during the excavation of the Kinoshita site in Tochigi Prefecture such an example was found. Although this specimen possesses elements of both the early and later forms, it differs greatly from specimens of Type I A in that both sides are hollowed out. It is, of course, dangerous to regard this artifact alone as conclusive evidence of the intermediary stage; and it is also impossible to conclusively prove the hypothesis presented here until "split ear-rings" are discovered which more closely resemble specimens of Type I A.

Although opinions vary among archaeologists in Japan regarding the origin and evolution of the ear-ornaments of the Jomon culture period, it is this writer's opinion that these clay objects evolved from the "split ear-rings" with some local divergence, and further, that the Jomon culture period ear-ornaments were originated as indigenous innovations of the inhabitants of Japan, and not introduced from the outside.

*Archaeological Institute,  
Keio University*